第996回サントリー定期シリーズ
2月22日(木) 19:00開演　サントリーホール

第997回オーチャード定期演奏会
2月25日(日) 15:00開演　Bunkamura オーチャードホール

第160回東京オペラシティ定期シリーズ
2月27日(火) 19:00開演　東京オペラシティ コンサートホール

指揮：チョン・ミョンフン

コンサートマスター：三浦章宏

ベートーヴェン：交響曲第6番 ヘ長調 Op. 68『田園』(約40分)

I.　「田舎に到着したときの愉快な感情の目覚め」— アレグロ・マ・ノン・トロッポ
II.　「小川のほとりの情景」— アンダンテ・モルト・モッソ
III.　「田舎の人々による愉快な集い」— アレグロ
IV.　「雷、嵐」— アレグロ
V.　「牧歌、嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」— アレグレット

— 休 憩 (約15分) —

ストラヴィンスキー：バレエ音楽『春の祭典』(約35分)

第1部 大地の礼賛
- 序奏
- 春の兆し(乙女たちの踊り)
- 誘拐の儀式
- 春のロンド
- 敵部族の儀式
- 長老の行進
- 長老の大地への口づけ
- 大地の踊り

第2部 生贄の儀式
- 序奏
- 乙女の神秘的な輪
- 選ばれし生贄への賛美
- 祖先の召還
- 祖先の儀式
- 生贄の踊り

主催: 公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会(2/22)
協力: Bunkamura(2/25)

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール

©上野隆文

指揮

チョン・ミョンフン

Myung-Whun Chung, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 名誉音楽監督

韓国ソウル生まれ。マンネス音楽学校、ジュリアード音楽院でピアノと指揮法を学ぶ。1974年チャイコフスキー国際コンクール ピアノ部門第2位。その後ロスアンジェルス・フィルにてジュリーニのアシスタントとなり、後に副指揮者。ザールブリュッケン放送響音楽監督および首席指揮者（1984～1989）、パリ・オペラ座バスティーユ音楽監督（1989～1994）、ローマ・サンタチェチーリア管首席指揮者（1997～2005）、フランス国立放送フィル音楽監督（2000～2015。現在は名誉音楽監督）、ソウル・フィル音楽監督（2006～2015）、シュターツカペレ・ドレスデンの首席客演指揮者（2012～）など歴任。1997年に本人が創設したアジア・フィルの音楽監督も務める。2022年6月、イタリア共和国功績勲章であるグランドオフィサーの称号を長年にわたるイタリアの文化発展への貢献に対して受勲。2023年3月、イタリア・ミラノのスカラ・フィルハーモニー管弦楽団として初めての名誉指揮者に就任した。

2001年東京フィルハーモニー交響楽団のスペシャル・アーティスティック・アドヴァイザーに就任、2010年より桂冠名誉指揮者、2016年9月に名誉音楽監督に就任。ピアニストとして室内楽公演に出演するほか、アジアの若い演奏家への支援、ユニセフ親善大使、アジアの平和を願う活動など多岐にわたり活躍している。

楽曲紹介

解説＝小島広之

ベートーヴェンの『田園』とストラヴィンスキーの『春の祭典』――成立時期も楽種も異なる両作品だが、共通点がある。作曲家が生きた時代の「自然観」が見事に結晶化されている点だ。

およそ100年の時を隔てた二人の自然観は対照的だ。ベートーヴェンが青年期を過ごした18世紀は、近代科学と啓蒙主義の時代であった。かつては奇跡と見分けがつかなかったような自然現象が理知的に把握されるようになり、人間は自然を支配する術を得るようになった。怪異の住まう場所であった森林は、もはや気晴らしの空間になりつつあった（散歩や公園はおよそこの頃になって流行した）。一方、ストラヴィンスキーの時代には、おおよそ逆の運動が起こっていた。無意識のような人間の内なる「自然」が認識されるようになり、その制御不可能性が認識されるようになったのだ。外の怪異は追い払われたが、内なる怪異を否定できなくなった。このような背景が、本プログラムの音楽的／音楽史的魅力を際立たせている。

ベートーヴェン
交響曲第6番 ヘ長調 Op. 68『田園』

19世紀のはじめ、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770-1827）の名声は約束されたものになりつつあった。だが、それに伴ってストレスは嵩み、難聴もいっそう悪化した。このような状況下、1802年に彼はウィーン郊外のハイリゲンシュタットを訪れる――中心地から馬車で1時間程度の近さであるが、療養には適切な自然に満ちた地域だ。ここでベートーヴェンは散歩や天体観測を楽しむことができた。

この自然体験が『田園』には息づいている。この作品には「絵画というよりむしろ感情の表現」という注釈が与えられたため、多くの解説ではこの作品が単なる描写音楽にとどまらないことに力点が置かれてきた。だが、ここではむしろ、

この注釈においてさえ絵画的性格が否定はされていないことを強調したい。特に第2～4楽章には、春のウィーンの香りが濃厚に刻み込まれている。近代人として自然に触れ合っていたからこそ、ベートーヴェンは、喜ばしい筆致で自然を音楽的に描き出すことができたのだ。彼は「私のように田園を愛する人間はいない」とさえ語った。

まだ落成して日の浅いアン・デア・ウィーン劇場で1808年12月22日に行われた初演は、端的に言って失敗に終わったが、このことは作曲の失敗を意味しない。4時間がかりのあまりに長大なプログラムやリハーサルの不備が失敗の原因であったと考えられる。

各楽章にはタイトルが付されている。**第1楽章**は**「田舎に到着したときの愉快な感情の目覚め」**。この楽章の最大の特徴は、最初に提示される主題が、パズルのように断片化されながら幾度も現れるところにある。同日に初演された『運命』との関連をおもわせる徹底的な労作を通して、ここでは具体的な自然ではなく、むしろより抽象的な「感情」が音楽化されている。

第2楽章「小川のほとりの情景」からは、濃い自然の香りがたちこめる。弦の細かな動きは、水面に映る光の遊戯を感じさせる。その背後には木管楽器の優美な歌。最終部、一旦音が鳴りやむと、フルートがナイチンゲール、オーボエがウズラ、クラリネットがカッコウの声を模写する。

第3～5楽章はアタッカ（切れ目なし）で演奏される。**第3楽章**は**「田舎の人々による愉快な集い」**で踊られるような三拍子の舞曲。トランペットも加わり、田舎の祭事を連想させる活力のある音楽。**第4楽章「雷、嵐」**はエピソード的な短い楽章。ティンパニとトロンボーン、そしてピッコロが加わり、けたたましい轟音が描き出される。**第5楽章**は**「牧歌、嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」**。冒頭、クラリネットが奏でる主題は、神話的で超然とした自然を思わせるほど衒（てら）いない。きわめて素朴な素材から織り出された歓喜の音楽は、最後には、全楽器による合奏を経て、別れを告げるような弦楽合奏に収斂する。

[作曲年代] 1808年 **[初演]** 1808年12月22日、ウィーン、アン・デア・ウィーン劇場にて、作曲者自身の指揮による
[楽器編成] ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦楽5部

ストラヴィンスキー
バレエ音楽『春の祭典』

1909年、イーゴリ・ストラヴィンスキー（1882-1971）は演出家セルゲイ・ディアギレフと出会った（その出会いの経緯は定かでない）。もしこの出会いがなければ、その後の音楽史は、おそらく全く違うものになっていただろう。こう主張できるほど、二人が共犯的に生んだ『春の祭典』は、従来の価値観を転覆してしまったのだ。

1913年5月29日、当時最新のパリ・シャンゼリゼ劇場で行われた初演は、よく知られているように、スキャンダルを巻き起こした。そしてこのスキャンダルこそが、本作品の音楽史的重要性の証拠であるといえる。スキャンダルの原因は、従来の音楽の受け手である教会、貴族、あるいは市民が醸成してきた「趣味」の裏切りにあった。本来なら理知的で優美に踊る“べき”ダンサーたちが、この作品では、内なる自然に征服されるように、狂気の音楽に屈服したのである。目を瞑りたくなるような野蛮と滑稽が舞台に上げられたことは、慣習的な趣味の持ち主にとって我慢ならないことであった。しかし、それにもかかわらず、この音楽は、10年足らずのうちにロンドン、モスクワ、フィラデルフィア、ベルリン……と世界中で演奏され、人々を魅了するようになる。古い趣味の否定は、当時の人々が欲したものでもあったのだ。この欲求が、今なお現代音楽を突き動かしている。

「大地の礼賛」と**「生贄の儀式」**の二部構成。本作は明瞭な筋を持たないが、ここではバレエの情景もあわせて解説する。第1部の**「序奏」**では、超高音のファゴットが狂乱の前の静寂とざわめきを印象付ける。**「春の兆し（乙女たちの踊り）」**は、最初に作曲された部分。弦楽器が不協和音を痙攣的に乱打し、春の到来に狂喜する村人たちを表現する。太鼓を合図に**「誘拐の儀式」**が開始すると、乙女たちを含めて皆で踊る。熱を帯びた踊りは、フルートのトリルに導かれて、ゆったりとした乙女たちの**「春のロンド」**に引き継がれる。Es管クラリネットの静かな旋律が、突如打楽器と低音金管楽器に打ち切られると、**「敵部族の儀式」**が開始する。張りのあるホルンの旋律に伴い**「長老の行進」**が開始すると、音楽が静止するが（**「長老の大地への口づけ」**）、即座に**「大地の踊り」**がはじ

まり熱狂する。

第2部の**「序奏」**は、木管楽器による妖しい旋律ではじまり、チェロのソロで終了する。神秘的な弦楽器にはじまる**「乙女の神秘的な輪」**は、旋律を維持しながら雰囲気を二転三転するが、もはや狂乱は止んだかのような印象を一貫して与える。しかし、唐突に太鼓が11回鳴らされると、獣性を剥き出しにした音楽が**「選ばれし生贄への賛美」**を表現する。次いで、トランペットを中心とする明瞭な旋律にのって乙女たちが踊る**「祖先の召還」**、すぐにバスドラムとタンバリンがリズムを刻み**「祖先の儀式」**。バス・クラリネットの奇矯なソロを経て**「生贄の踊り」**―― 生贄に選ばれた乙女が踊り、ボルテージは最高潮に達する。最後の劇的なトゥッティにおいて、生贄はこと切れる。

[作曲年代] 1911～1913年 **[初演]** 1913年5月29日、パリ、シャンゼリゼ劇場にて、ピエール・モントゥーの指揮による
[楽器編成] フルート3（3番は第2ピッコロ持ち替え）、ピッコロ、アルト・フルート、オーボエ4（4番は第2イングリッシュ・ホルン持ち替え）、イングリッシュ・ホルン、小クラリネット（Es、D）、クラリネット3（3番は第2バス・クラリネット持ち替え）、バス・クラリネット2、ファゴット4（4番は第2コントラファゴット持ち替え）、コントラファゴット、ホルン8（7、8番はテナー・テューバ持ち替え）、ピッコロ・トランペット、トランペット4（4番はバス・トランペット持ち替え）、トロンボーン3、テューバ2、ティンパニ2、打楽器（タンブリン、大太鼓、トライアングル、アンティーク・シンバル2、シンバル、タムタム、ギロ）、弦楽5部

こじま・ひろゆき／1993年生まれ。専門は20世紀音楽・音楽批評研究。現在、東京大学総合文化研究科およびベルリン・フンボルト大学に在籍。研究活動と並行して、最新の現代音楽における「作曲行為」に触れるためのウェブメディア「スタイル&アイデア：作曲考」を運営。さらに音楽評論活動を行なっている（第9回柴田南雄音楽評論賞奨励賞受賞）。